



一緒に並ぶ電柱がかわいく見えるほどの立派な杉並木だ。見る者が元気を分けてもらえるような生命力のたくましさも感じられる。百年も昔から現代の車社会を見越していたかのように広い道幅に設計した先見性も秀逸

仙北郡美郷町の旧千屋村地区には、周囲のどかな田園風景には似つかわしくないほどの立派な杉並木がある。徳川家康の威光の象徴である日光杉並木をほうふつとさせる壮観さだ。

しかしこの辺りに家康に匹敵するほどの権力者がいたという史実もなく、有力な寺社の参道というわけでもない。

いつ誰がどのような目的でこのような並木道を築いたのか。種明かしをすれば、郷土の先覚者坂本理一郎（雅号東嶽）に行き当たる。

1861年に千屋に生まれた東嶽は、東西の学問に親しみ、郡会議員から貴族院議員まで上り詰めた立志伝中の人物だ。その東嶽が明治30年代、郷土千屋に理想の村づくりの構想を掲げ、切り開いた原野の中心部に役場や学校、郵便局などの公共施設を集中配置し、周囲の集落と連絡する直線道路を放射状に配した。それがこの並木道の由来だ。

並木は、道を行き交う人馬を風や雪から守る、今で言うところの防風・防雪柵の役割を担っていたのかもしれない。

明治30年代といえば、今から百年あまりも昔のこと。そんな時代から理想的な郷土のあり方を模索し私財をなげうってまで実現した人物が秋田にいたことには驚かされる。

本年3月11日に発生した東日本大震災では、幸いなことに秋田では甚大な被害に見舞われることはなかったが、太平洋側の多くの場所で、地域が根こそぎ消滅してしまったかのような凄惨なありさまとなった。まだまだ地域の再生のための図面を引く段階ではないかもしれないが、この千屋の画期的な村づくりの例のように、いつかは、そこに暮らす誰もが、居心地よく、平和で心穏やかに笑顔で過ごせるような、理想的な新生の郷土に生まれ変わることを、願ってやまない。

人それぞれの理想郷